

称号及び氏名	博士（言語文化学） 田中 奈緒美
学位授与の日付	2024年3月31日
論文名	日本語雑談会話の話題移行パターンと話題導入時の言語的特徴 —女性初対面二者間会話を対象として—
論文審査委員	主査 高木 佐知子 副査 相田 洋明 副査 山崎 正純 副査 西尾 純二（甲南大学）

#### 博士学位論文要旨

本論文では、女性の日本語母語話者による初対面二者間雑談会話を分析資料として、その話題移行の特徴を多角的な観点から考察し、話題移行のパターンと話題導入時の言語的特徴について考察した。本論文で言う話題移行とは、関連のない話題に移る話題転換と関連のある話題に移る話題展開の両方を含んだ、会話における話題の変化を指し、話題導入発話とは、話題移行が起こった箇所の直後の第一発話を指す。

話題移行のパターンには、言語間・文化間で違いがあると言われ、日本語の話題移行についても、他言語との対照研究を通じて、明確な境界を持つ転換が多い等の特徴が指摘されている。また、日本語学習者がその特徴を自然習得することは容易ではなく、スムーズに話題の境界付けをすることができない例が指摘されている。そのため、先行研究でも、話題移行箇所の特徴と、境界付けのためのストラテジーに関する検討が行われているが、内容の関連性や先行話題の終了のための相互行為の有無といった、先行研究で検討されている特徴だけでは、話題移行の際に使用されるストラテジーの使用ルールを明らかにすることができていない。

本論文では、ストラテジーの使用ルールを解明するためには、より多くの観点から話題移行を特徴づける必要があると考え、【先行話題の終了プロセス】【後続話題の導入のきっかけ】【内容の関連性】【話題の種別】【話題領域】【言語形式】【表現姿勢】という7つの項目を用いて、多角的に話題移行の様相を把握することを試みた。本論文の具体的な目的は、次の4つである。

- ・対象となる会話の話題移行箇所に対して、複数の観点を用いた分類を行う。
- ・複数の観点を用いた分類によって、話題移行箇所の特徴を多角的に記述する。
- ・話題移行で現れやすい特徴と特徴の組み合わせのパターンを探る。

・現れやすいパターンにおける話題導入発話の用例を観察し、言語的な特徴を記述する。以下、本論文の考察を通して明らかになった点を、話題移行箇所の特徴と話題導入発話の言語的特徴に分けて述べる。

まず、話題移行箇所の特徴としては、直前の話題と関連する内容を導入する傾向が強いこと、直前の話題と関連しない内容の導入は、先行話題の終了プロセスが長い時に起こりやすいこと、新しい話題として相手話題が好まれ、自分話題の導入は直前の話題内容と関連のある時に導入される傾向にあること、という3点を明らかにした。

本論文の会話資料では、直前の話題と関連する内容が導入される話題移行である、発展話題（全話題移行箇所のうち83.4%）と回帰話題（同6.7%）を合わせた割合は90.1%であったのに対し、直前の話題と関連しない内容を導入する新出話題（6.1%）と再出話題（3.7%）の導入は合わせて9.8%で、1割にも達していなかった。

また、直前の話題と関連がない内容を導入する新出話題と再出話題では、その導入の前に先行話題の明確な終了プロセスが出現していた。一方で、直前の話題と関連する発展話題では、先行話題の明確な終了プロセスがあるものが29.8%、終了プロセスが全くないものが30.0%と、同程度の割合であった。直前の話題と関連しているという条件の下であれば、初対面会話であっても、先行話題の終了プロセスがない話題移行も例外的ではないことが明らかになった。

話題領域の観点から見ると、内容の関連性のどの指標においても、相手が情報提供可能な相手話題を導入する割合が最も高かった。中でも、直前の話題と関連のない話題を導入する際には、相手話題を選択する割合が高くなる傾向にあった。回帰話題の際は、相手話題を導入する割合が比較的低く、自分話題の導入の割合が高まるが、これは、関連する短い話題が挿入された後、中断された元の話題に戻るような話題移行が、回帰話題の中に一定程度含まれるためである。回帰以外で自分話題の導入の割合が高いのは発展話題で、相手話題の導入の半分に満たない割合ではあるが、直前の話題と関連がある場合には、相手からの質問に寄らない自主的な情報開示が見られた。

次に、話題導入発話の言語的特徴については、新しく導入される話題内容のタイプ（【話題の種別】と【話題領域】の組み合わせ）によって、使用される話題導入発話のタイプ（【言語形式】と【表現姿勢】の組み合わせ）が異なること、同じ話題導入発話のタイプでも、導入する話題の話題内容のタイプによってその言語表現形式や機能に違いが見られること、話題移行箇所で見られる特徴的な談話標識が存在すること、の3点を明らかにした。

話題領域の各指標で比較すると、相手話題>共通話題>自分話題の順に、使用される話題導入発話のタイプが少なくなっていた。これは、話題移行全体で相手話題の導入が最も多いことに繋がっており、相手話題で話を続けていくために、様々な導入のタイプが用いられるのだと考えられる。

複数の話題内容のタイプにまたがって使用される話題導入発話のタイプは、「疑問形式

「教示要求的」、「平叙形式－教示・伝達的」、「平叙形式－共感要求的」「平叙形式－共感的」の4つであった。ただし、それぞれの具体的な言語表現は話題内容のタイプによって違いがあり、例えば「疑問形式－教示要求的」の話題導入発話で言えば、「事態・属性系－相手話題」の導入に用いられる際には、通常の、相手に問いかける疑問文が用いられるのに対して、「事態・属性系－共通話題」の導入に用いられる際には、発話者の独り言に近い形式で発話される等、相手の情報所持の可能性に合わせた発話形式の調整が観察された。

また、話題導入発話のタイプが「平叙形式－教示・伝達的」であるものは、話題領域によって機能が顕著に変わっていた。すなわち、自分話題の導入時には、自分が持つ情報を提示するという機能を持つのにに対し、共通話題の導入に使用される場合は、情報の提示に加えて、相手と情報を共有していることを確認するという機能が加わる。さらに、相手話題の導入で用いられる場合には、自分が持つ情報を提示する機能が弱まり、相手の話に対する理解や興味を示すという機能の側面が強くなる様子が観察された。話題内容のタイプを構成する【話題の種別】と【話題領域】は、その事柄に対して誰がどの程度情報を持っているのかに関わっており、会話参加者は、相手と自分が持つ情報量を比較して、その状況に見合った形式・姿勢・表現で話題を導入していると言える。

特定のタイプで使用される特徴的な談話標識としては、「事態・属性系－相手話題」×「疑問形式－同意要求的」に分類される話題移行箇所、「あ」「じゃあ」「もしかして」の使用が観察され、「思考・感覚系」の話題で、「でも」の使用が広く観察された。また、全話題移行箇所で使用されている談話標識の種類を確認し、分類するとともに、使用回数の多かった談話標識について、話題移行の各特徴との関連を調べたところ、話題移行の三大区分である「要求系」「教示系」「共感系」それぞれで、現れやすい談話標識のグループがあることが分かった。

以上の考察から得られた知見を基に、日本語母語話者による初対面二者間雑談会話の話題移行のパターン図を作成した。得られたパターンは、必ずこうなる、という厳格なルールではないものの、日本語母語会話の一定の傾向を表したものであり、日本語教育への応用に向けた基礎的な資料として有用であると考えられる。特に、全く新しい話題を導入する新出話題は、その導入の前に比較的長い先行話題の終了プロセスが必要であることや、新出話題では相手話題が選択され、要求的な姿勢で導入される傾向にあることを知識として知っておくことは、日本語学習者にとって、話題移行に関わるコミュニケーション摩擦を軽減する上で役に立つと考えられる。

本論文の構成は、以下の通りである。

第1章では、本論文の背景と目的を説明し、課題とアプローチの方法について述べた。第2章で先行研究の概要を示し、第3章で、本論文の研究方法について、分析データの概要、話題移行箇所の認定方法、および分析の枠組みを中心に説明した。

第4章では、多様な観点による項目を用いて各話題移行箇所の特徴を多角的に記述し、

内容の関連性を軸として、各項目の指標の出現傾向を分析した。第5章では、新しく導入される話題内容の特徴という観点から、話題導入発話の形式と機能を観察し、考察した。第6章では、話題移行箇所における多角的な特徴間の相関を多重的に調べることによって、話題間のつながりのあり方と、次に選択される新しい話題内容、および話題導入時に用いられる言語表現の関連について考察し、話題移行のパターン図を作成した。第7章では、分析資料で用いられている話題開始のための談話標識を調べ、情報の種類により分類するとともに、話題移行パターンとの関連について考察した。

最後に、第8章で、本論文のまとめと今後の課題について述べた。

## 初出一覧

### 第4章：

「多角的指標からみた日本語の話題転換の様相—女性二者間の初対面雑談会話の分析から—」、『日本語教育』185号, 62-76, 2023年8月.

### 第7章：

「談話理解の視点から見た話題開始のための談話標識の分類」、『日本語教育』170号, 130-137, 2018年8月.

「日本語母語会話における話題内容から見た話題転換タイプと話題開始ストラテジーとしての談話標識の使用の関連について」(口頭発表), 2015年度日本語教育学会秋季大会(那覇), 2015年10月.

## 学位論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会

### 1 この論文の位置づけと意義

会話における話題移行には、多くの構成要素がある。移行の前後の話題との内容上のつながり方、移行前の話題を終了させる手続き、移行後の話題開始時に使用される談話標識など、その他にも多くの要素が関係しあって、話題移行は実現する。また、そのような話題の移行は、言語・文化ごとの特徴があり、その特徴の違いがコミュニケーション摩擦の発生要因になりうる。そのため、話題移行は、会話教育のなかでも注目される事象である。

この論文は、会話の中で生じる個々の話題移行を収集し、その特徴群を整理し、その整理に合理的・汎用的な説明を与えようとしている。この整理・説明は、日本語会話のダイナミズムを解明する研究としての位置づけをもち、日本語会話教育の基礎的な知見にもなりうる。なお、この論文では、話題移行の手法が豊富であると思われる女性の会話を分析対象として、日本語の話題移行の分析方法が提示されているが、その先には話題移行の属性論的多様性を考察することが展望されている。

### 2 この論文の概要

この論文は以下の 8 つの章から成っている。論文の構成を章立てに沿って、本論文の概要と特色を、論文への評価を交えつつ述べる。

第 1 章 本論文の目的と構成

第 2 章 話題移行に関する先行研究と本研究の立場

第 3 章 研究の方法

第 4 章 話題間の内容の関連性を軸とした話題移行の多角特徴の分析

第 5 章 話題内容からみた話題導入時の言語表現の特徴

第 6 章 話題移行の特徴間の関係と話題のつながりが話題移行に及ぼす影響

第 7 章 話題開始のための談話標識の分類に基づく話題移行の多角的分析

第 8 章 本論文のまとめと今後の課題

第 1 章では、日本語会話のなかで生じる話題移行について、その多岐にわたる特徴を整理し、出現しやすいパターンと言語的特徴を明らかにするという、本論文の目的が述べられる。また、その目的を達成するために、「話題移行の特徴を分類する」「分類を用いて話題移行の特徴を記述する」「共起がパターン化している特徴を探る」「パターン化した話題移行に見られる言語的特徴を記述する」という課題が掲げられた。

第 2 章では、話題の移行に関わる先行研究を概観する。話題の認定方法や話題移行箇所

の認定方法に関する先行研究の批判的検討は、従来の研究の到達点と課題を整理するとともに、「話題」「話題移行箇所」というこの研究の根幹をなす概念の規定が最適と思われる形で行われている。さらに筆者は、話題移行が複雑に多くの要素が絡み合う現象であるにもかかわらず、従来の研究群が移行に関与する少数の要素のみを取り上げて議論しているという問題点を喝破する。そしてこの論文では、この問題点を打破する新しい方法論の開発を主要な課題としている。このように、本論文の第2章は、従来の研究を詳細に検証しつつ、自身の研究と説得的に関連付ける秀逸なレビューとなっている。

第3章では、分析対象資料についての説明と、第2章で行われた丁寧な先行研究のレビューをもとに、多くの概念の規定と整理が行われ、分析の枠組みが示される。中でも図3-1「観点・項目・指標の整理図」は、話題移行に関連する要素の体系的なインデックスであり、本研究のフォーマットとなっていると同時に、この整理自体が重要な成果となっている。

第4章から第7章は各論である。構築した話題移行の要素の分類と分析の枠組みを用いて、日本語会話の話題移行が質的・量的に記述される。

第4章では話題移行後の話題が、新出の話題か、前の話題の発展的内容かなどといった話題間の関連性のあり方と、ほかの多くの話題移行の要素との共起関係を探る。この分析によって、日本語では英語より少ないとされる切れ目のない話題移行 (stepwise movement for topics) であるが、移行後の話題が移行前の話題を発展させる場合は、多く見られることを突き止める。さらに、発展話題であるときは、自分の話題を導入しない傾向にあり、表現姿勢は教示要求的であったり共感的であったりとバラエティに富むといった多くの要素を視野に入れた分析を展開する。このような話題移行への複眼的な分析・考察が本論文の特徴となっている。

第4章は、話題の「内容の関連性」を軸に、他の多くの要素が複合的に分析されたが、第5章ではまず、「話題の内容」と「話題導入発話のタイプ」の組み合わせを設定する。例えば<物事のコト的な「事態・属性系」の話題種別、かつ「自分話題（自分だけが情報提供できる話題）」という話題領域>が新規話題の内容であったとき、その他の要素との共起関係を探る。すなわち「どのような内容の話題を導入するときに、どのような言語表現形式が用いられているのか」が5章のリサーチクエスションである。それについてのアンサーは表5-2と表5-3に集約される。これらの整理表は話題移行を詳細にパターン化したものであり、今後、言語教育への活用が期待される。

第6章では、3章で整理された話題移行の多数の要素が、話題移行のなかで関わり合う様相を、林の数量化Ⅲ類を用いて分析した。これによって、話題移行のなかで、強い特徴になりうる要素と、その要素と共起する要素といった関係性が可視化された。第7章においても数量化Ⅲ類を用いた解析が行われるが、ここでは新規話題を導入する談話標識に焦点が当てられる。新規話題を導入する談話標識には、日本語では感動詞「あ」「ねえ」などの感動詞や、「でも」などの接続詞、「話は変わるけど」などのフレーズと、様々な種類があり、使用回数も多く、日本語学習者には習得が難しいとされている。またそれだけに、使用方法

の解明が重要視されているところである。この章では表 7-3 のように当該談話標識を分類し、さらにその分類された談話標識が、ほかの話題移行の諸要素とどのように共起するかを、数量化Ⅲ類などを用いて考察した。6 章、7 章のいずれでも、数多くの話題移行の要素が、親和性の濃淡を持ちながら組み合わせりつつ、話題移行を実現させている様子が明らかにされた。

第 8 章では、第 4 章から第 7 章から得られた知見を整理し、本論文の成果を一覧するとともに、本論文で明らかにされた話題移行の諸要素の運用傾向から外れる、いわばイレギュラーな要素の運用についての考察が課題として示される。その課題を指摘する姿勢は、研究の成果を日本語教育の現場に落とし込むことを志向するものである。

### 3 この論文の評価

この論文の評価について、審査基準に基づいて以下に述べていく。

#### 1) 研究テーマが絞り込まれている。

この論文の目的は、第 1 章で示されたように、日本語会話における話題移行のパターンを見つけ、パターンごとの話題導入発話の特徴を明らかにすることである。先行研究のレビュー (2 章) から、研究対象とする事象と概念の整理 (3 章) は、この目的と密接に結びついている。第 4 章から第 7 章の各論では、それぞれの章で視点を変えた話題導入発話の特徴解明が試みられている。まとめの第 8 章では、各論で明らかになった話題導入発話の特徴が整理されている。終始、テーマに沿った構成となっており、テーマの一貫性は明白である。

#### 2) 研究の方法論が明確である。

本論文では、雑談会話のコーパスを用いて、日常会話で行われる何気ない話題移行を捕捉し、先行研究を踏まえながら話題移行に関わる多くの要素を整理する。第 3 章で行われた諸特徴の整理は、全ての各論で使用され、方法論の面でも一貫性がある。また、話題移行の特徴を形成する要素の使用・共起傾向を量的に把握すると同時に、多くの具体的な話題移行の事例を取り上げ、話題移行の仕組みを個別質的に説明する。その説明がまた、話題移行の要素の使用・共起傾向を説明する。質的考察と量的考察とが補い合うという、明確で周到な方法論のもと、論が展開されている。

#### 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

先行研究についての調査と自身の研究への関連付けは、本様式「2 この論文の概要」でも述べたように、秀逸なものとなっている。先行研究の知見は、それぞれの知見の過不足を踏まえ、自身の研究のテーマであれば、いかなる立場をとるべきであるかを説明する。その議論を成立させる先行研究についての調査は、十分なものであると言える。

#### 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

話題移行の特徴記述という性格を持つ本論文では、その特徴を「特徴」として認定するために、話題移行の各事例の質的把握と、話題移行の諸要素の使用傾向の分析による質的把握の妥当性の裏付けが求められる。この点、事例を多く掲げ、その特徴を詳細に説明し、さらに量的分析による裏付けが行われており、論拠は確保されている。質的把握における話題移行の特徴形成に関する立論は、使用傾向という量的な分析のみから補強されるものではないが、さらなる検証を行うことは本論文の範疇を超える。今後の研究課題である。

#### 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

話題移行に関する研究は、会話という相互作用のダイナミズムを解明するという社会言語学的な性格を持つだけでなく、その言語教育に応用する知見を提示するという応用言語学的な側面を持つ。本研究は、多くの話題移行を構成する要素を多角的にとらえるという、従来の研究では未成熟な領域に先鞭をつけるものとなっている。この点において、当該分野の学術研究の進展に貢献すると同時に、独創性もまた備わっていると言うことができる。

さらに、本研究の成果を言語教育に活用させるという、次なる課題を解決するための道筋の入り口が示されている。

#### 4 審査委員会の結論

審査の結論を得るべく、審査委員会は本論文を精読の上、最終試験の主査・副査による口頭試問を行った。その結果、本審査委員会は、全員一致で、この論文が人間社会システム科学研究科言語文化学専攻の博士論文審査基準をすべて満たし、博士学位の取得にふさわしいものであると結論づけた。